

## 書 評



## 『ロッチデイル物語』

友貞 安太郎 著 コープ出版  
定価1400円 31頁

佐藤 弘子 (協同総研事務局員)

「ロッチデイル公正先駆者生協」が創立されたのは150年前の1844年のことである。協同組合の運営を成功させるシステムをつくりだし、協同組合運動の全体を展望してその

基盤をつくりあげたロッチデイル公正先駆者生協の歴史と取り組みが10項目に分けて記されている。

19世紀前半の産業革命、地場産業の綿・羊毛織物が家内手工業から動力機へ、それにともなう新たな産業の成長という産業構造の大きな変革の中で、いやおうなく巻き込まれていく労働者の不満から起こる社会運動。貧困や飢餓。まさしく産業革命の光と蔭のただ中という時代背景のもとにこの生協は生まれた。

運動の中心となったのは、比較的収入の安定した熟練職人や独立した自営業者であり、オウエン主義を信奉する社会主義者であった。ロッチデイル公正先駆者生協は、協同組合社会を展望しつつ「自給自足の協同体」を目的とし、構成員が対等・平等で、自助と助け合いの精神に満ちた「理想の協同体」の建設をめざした。その定款は堅実で確かな運動と事業を通して『ロッチデイルの原則』として世界の協同組合運動の中に拡がっていき、それがやがて1966年のICAの『協同組合原則』としてまとめられることになる。

事業を開始するために、組合員が生活費を切り詰めて集めた出資金で店舗を開くこととなったが、事業の展開はゆっくりとしたテンポながら堅実な経営がなされていった。1850年協同組合による製粉工場をという提起をうけて生産事業協同組合が創立された。

——筆者は「生協の『関連事業』」の始まりです

が、株式会社方式ではなく協同組合方式であったことを、世界や日本の現代の協同組合運動は学ぶべきです。」と述べている——

「冒険的、ともいわれた生産事業協同組合の取り組みを始めたが、工場経営がうまく行かず経営危機にも直面しつつ、それを乗り越えていった。たとえば小麦粉は混ぜ物をして白くした市販のものに比べて、純粋の小麦粉のために黒くて見栄えの悪い生産協同組合の品を、生協はその製品しか取り扱わないこととして品質の良さを説得し支持を広げるといことで事業を発展させていった。生協の製品の評価と支持は広まり、生産協同組合に参加する生協も増え、世界で最初の「協同組合間の協同事業」が軌道に乗り、これがさまざまな協同・連帯事業に発展して行くこととなる。

一方、目的達成のためには教育活動の必要性を確信して図書館をつくり、講座を開設するという活動が進められてきた。——と歴史をたどる。

決して華々しいスタートでもなく、歩みは実にゆっくりと展開されていくが、イギリスから海を渡りヨーロッパへ世界中へと広がっていったのは「理想」と「原則」があったからこそといえる。

——この『ロッチデイル物語』は150年前にあったことを知るだけの《昔話》ではなく、21世紀を迎えようとしている、今、だからこそ世界の協同組合が「協同の精神」をロッチデイルの先駆者たちの試みから学び直して行く事の意義はますます深まっている——と述べられている。

現在の生協が事業として大きく広がってきた中で見えにくくなっているその精神を、まさに教育の必要性として、この本をグループで読みあつて行く提案が生協の中に生まれたらと思う。図版や写真によって当時の状況がつかみ易くなっている。ぜひ多くの人々が手にとってほしい。